

みてきた東欧革命

—ベルリン・ブカレスト

真瀬 勝康

今回の旅行は、一月三日に成田を出発し、チャウシエスク処刑後の激動するルーマニア革命を駆けあしで見てまわった約二週間のあわただしい旅だった。滞在したところは、フランクフルト、ベルリン、ザグレブ、ブカレスト、ブラショフ、ティミショアラ、ベオグラード。

飛行機は料金が大変安いことと、東ヨーロッパのネットワークが充実しているアエロ・フロートを利用した。もつともモスクワでのクルー引き続きのミスで出発時刻がおおはばに遅れたり、チェックインしたトランクがモスクワに積み残され、三日後によりやく西ベルリンの友人宅で受けとるというハプニングにみまわれるなど今回の旅は、最初からトラブルつきであった。

アエロ・フロートは、軍用輸送機のようなイリュージョンと太ったおばさんスチュワーデスで相変わらずであったが、機内でのガイドやシユレメチェボ空港の情報提供など、全般的に乗客へのサービスがこれまで以上に向上したことを実感した。というのも、昨年の夏にアエロ・フロートを利用したさいに空港で、何の説明もなしにただひたすら待たされることを強制され、どうしてそんなにほっておかれるのか、かいかも見当もつかない不思議な状況を経験していたので、そうした「カフカ的狀況」が、わずか半年足らずで改善されたことに示されるペレストロイカの急速な進展に目をみはった。

『壁』崩壊直後のベルリンにおける変化も想像以上であった。なか

でも東独の国境警備隊の親切に大変驚いた。滞在したのは西ベルリンだったが、西から東へ『壁』の外と内側からベルリンを見た。新聞でも報道されているように、ベルリンは今、『壁』見物ツアーの観光客で一杯である。

市の中心部クーダムからバスで旧帝国議会『ライヒス・ターク』までくると、そこはもうベルリン分断の象徴であるブランデンブルグ門のすぐ近くである。『ライヒス・ターク』のバス・ストップに降り立つと、コツ、コツ、コツという『壁』のカケラを取ろうとするハンマーとノミの音があたりにこだましているので『壁』に近いことがわかった。

ブランデンブルグ門のまわりは内外観光客で一杯だった。『壁』ぞいに観光客が、いっぱい群がって、思い思いにスナップをとったり、ビデオをまわしたりして、あたりはまるで原宿のような喧噪にまつまっていた。それを目当てにトルコ、ポーランドその他、東からきたと思われる少々うさんくさい人たちが『壁』のカケラを売っていた。そういう現実を見せつけられると、あたかも『壁』のカケラを取ろうとするハンマーとノミのコツ、コツ、コツという音がマナー！ マナー！とコダマし、『壁』を押し倒した自由化にたいして、それを社会の底辺からつき動かしている欲望の力を暗示しているかのようであった。

東ベルリンにあるシェーネフェルト空港からユーゴのザグレブ行き

の航空券を買ったので、いつものように『トランジット・バス』で東ベルリンへ入ろうとしたところ、ベルリンの友人がそんな遠回りなどしないで西ベルリンの市バスにのって、ダイレクトに東へ入れるから自分も空港まで見送ってやると言ってくれた。西ベルリンでは彼の家に泊まっていたので、そこからトランジット・バスステーションまではひじょうに遠くにあったことと、『市バス』で東へ入るのも興味深いと思ひ、彼の提案を受け入れた。ミッテンバルダー駅から地下鉄にのって、終点まで行って、そこから『市バス』に乗りかえてシェーネフェルト空港駅まで行き、空港バスに乗って空港へ行くという所要時間三―四〇分のルートであった。

私がビザを持ってないから心配だ、と言うと、ドイツ人はビザなしで東へどんどん行っているから大丈夫、心配ないと友人は返答した。シェーネフェルト空港近くの国境までは非常に近かったので、彼の提案は魅力的であった。以前ならトランジットバスで国境まで一時間以上かかるのに、彼の家からでは地下鉄と市バスで三〇分程度だからだ。彼も日曜日の昼食前に散歩気分で子供をつれて、私にベルリンのこの変化を案内できるのは、少々得意そうであった。

私が懸念したように、日本人はビザなしではやはり入国できなかつた。しかし、ビザなしで検問所を通過できた。以前なら国境通過にさいして、ビザなしならそこから引きかえせ、と命令すれば良かったのに、ここの警備隊員は目的地へ行く理由を聞くと、すぐ空港まで電話をかけてくれ、わざわざ空港バスを筆者一人のために呼んでくれたからである。検問所わきの警備隊詰め所待つこと一〇数分、大型バスがやってきて、詰め所のところまでUターンし私の前にとまった。

バスがきたときは本当に感激した。というのも、『のんびり』『ゆっくり』決められた業務以外はけつしてやろうとしない「社会主義」公共運送機関が決められたルートからはずれて、ビザなし日本人を空港に運んで行ってくれるというのだから。もちろん特別料金はいっさい

なしであることは言うまでもなかった。

くわえて空港での手荷物検査も一変していた。昨年の夏には同じシェーネフェルト空港でスミからスミまでトランクを検査したのに、今度は西側とまったく同じでノー・チェックであった。変われば変わるものである。私は『壁』の崩壊が組織を変え、人間を変えたことをよく実感した。

いったんユーゴのザグレブに入国した後、ベオグラード経由でブカレストに入ろうとしたが、あいにくザグレブ空港は濃霧のためにブカレスト行きの飛行機（ユーゴ航空）がキャンセルされ、飛行機（クロアチア共和国経営のアドリア航空）は、反対方向の西ドイツのフランクフルトに飛んで、そこでブカレスト行きのパンナム便に乗りかえることになった。けつきよく飛行機の連絡が悪くて、フランクフルトに一泊して翌日のパンナム便に搭乗することになった。

東ヨーロッパ諸国と国境を接している西ドイツの銀行では、東ヨーロッパ通貨が『実勢レート』で売られているので（実勢レート表参照）、空港の両替所でルーマニア・レイを一五〇マルクほど仕込んだ。公定レートの十分の一で手に入れたこのお金は、たとえば五つ星クラスのレストランでワインを一本つけてフルコースのディナーをとつても四〇〇円ぐらいですみ、ルーマニア滞在中におおいに役だった。

このパンナム便は、フランクフルトからブカレストへ直行するかと思いきや、これまたポーランドのワルシャワ経由ブカレスト行きであった。何ということはない東ヨーロッパをグルーッと、ひとまわりしたようなものである。ワルシャワまではほとんどがポーランド人乗客であった。その一方で注目すべきは、この機内には、革命後のビジネス・チャンスをもにしようと、ルーマニア系アメリカ人ビジネスマンもかなり搭乗していた。すでに東欧ビジネスは始まっているのである。

チャウシェスク処刑後、一〇日足らずということもあって、空港の

警備は敵重をきわめていたが、入国そのものは、すぐ簡単であった。ビザは、空港で即発行してくれ、簡単な入国審査をただだけでOKであった。真つ暗な空港をでると、そこは『体制』崩壊後の弛緩した状況をものごたるように、外国人を商売のタネにしようとするブローカーまがいの人物がウヨウヨしていた。

飛行機がおおはばに遅れたために、もう空港バスは運行をやめており、しかたがなく客引きと交渉してタクシーに乗ることにした。値段の交渉が、おもしろかった。空港からダウンタウンにある『ノルド・ホテル』まで(タクシーに乗って、四、五〇分)最初五〇ドルから始めて、二〇ドル、一〇ドルに下がり、最後はドルでなくて現地通貨四〇〇レイ(三ドル≒四五〇円)で手を打った。ずいぶん安くなったと思っていたがタクシーを下車するときメーターを見ると、何と二〇〇レイ(一・五ドル)ではないか。結局のところ倍の値段を吹っかけられ、ボラれたのであった。

ルーマニアの物価は日本人の目から見ると、公定レートで二分の一、実勢レートでは十分の一なので支払いに問題はないのだが、一般にタクシーなどは外国人に法外な値段を吹っかけるのが常であった(反面、メーターどおりに請求する正直タクシーや道に迷った外国人を自分の車に乗せてくれる親切なルーマニア人のいたことも事実である)。

さて乗車したタクシーは、ずいぶんと年季のはいったおんぼろロープであった。車体はガタガタでヨタヨタと走り、クッションはコシが抜けていた。ブカレスト市内の立派なミニユメントや高層建築物を除いて、すべてがこのタクシーのようにガタガタ、ポロポロであった。道路は札幌のようにアイス・バーンになっても、車がそんなポロポロであるからして、タイヤもしつかりとツルツルの夏タイヤであった。旧共産党本部を警備している装甲車などはタイヤのトレッドが山のようにもろあがっているのに、である。

ホテルもしつかり外国人価格をとるわりには、外はマイナス五―一

〇度というのに暖房は人肌程度のかすかな、ほの「暖かさ」であったり、ベットは壊れていたりしていた。チャウシェスク政権末期には債務返済のために自国の食料消費分まで輸出に回して、国民が飢えていたということがいわれていたが、さすがに飢えた人々の存在は見かけなかった。むしろ市民は、革命の犠牲者を悼む国民服喪の日にはアルコール類を控えても、そうでない日にはレストランでごちそうを食べる市民たちの姿を見かけることが多かった。

しかし、食料品を除いた消費物資の貧困は、貧しいといわれる東ヨーロッパのなかでも最低のランクに位置するのではなからうか。その象徴的な光景にブラシヨフでくわした。通りに人だかりしているの、何だと思ってみてみると、なんと使い捨てライターの注入屋である。東ヨーロッパ広しといえども、こんな店があるのは、ルーマニアぐらいのものであろう。

よくソ連・東欧を旅行してパリや西ベルリンに帰ってくると、街がぱーっと明るくなったような印象をもったり、何やらほっとするといふことがよく言われている。

私は、あまりの寒さに早くルーマニアを脱出しようと、帰りは飛行機を使わないで、鉄道でブカレストからブラシヨフ、ティミショアラをまわって、国境を通過し、ベオグラードにかえってきたが、そのとき大通りには、ルーマニアと比べてピカピカの「新車」が多かったり、町がぐんと明るく華やいだという印象にわれながら驚いた。ベオグラードは首都とはいえ、パリやベルリンではなく、あの経済危機にあえいでいるユーゴと比べてなのであるから、ルーマニアがいかに貧しいかがわかるうというものである。

さてブカレストの印象は、まだ戒厳令がしかれていたもので、政府機関、駅、やホテルなど街の要所、要所には完全武装の兵隊が反革命秘密警察「セクリターテ」を警戒していたり、銃撃戦のあった場所には、おびただしい弾こんや戦闘にもなって発生した火災によって焼け落

■西ドイツにおける東側通貨の実勢レート

	売り(a)	買い	公定レート(b)	b/a
東独 100マルク	11.0	14.0	100.00	9.1
ブルガリア 1レバ	0.1	0.24	1.41	14.1
ポーランド 100ズロチ	微小	0.1	61.9	619.0
ルーマニア 100レイ	1.1	2.5	20.77	18.9
チェコ 100コ罗纳	4.2	5.6	19.72	4.7
ハンガリー 100フォリント	1.3	2.6	3.23	2.5
ソ連 1ルーブル	0.09	0.23	2.8	31.1

- フランクフルト市中銀行店頭相場調べ (1990. 1. 12)
- ポーランド・ズロチのみは買いレートで計算
- 「売り・買い」は銀行側からみたDMの売り・買い



プラケストにて 革命の犠牲者に花輪をささげる人々 (撮影・真瀬)

ちた建物が中心部のあちこちに見られ、なまなましい雰囲気にも包まれていた。

また共産党本部前の巨大な広場には戦闘の犠牲になった人々の遺影や花束などが飾られ、そのまわりには無数のローソクがともされていた。写真をとる人、ローソクをそなえる人、十字をきる人、党员証と思われるカードを焼く人、革命について討論する人々など広場には数万以上の人々で埋め尽くされていた。なかでも目をひいたのは、聖歌を歌いながらアイコンを先頭に行進するルーマニア正教会の牧師と市民のデモであった。

さて、私は久しぶりに中華料理店で食事をしていると、調理場の中から歓声が聞こえたので、のぞいてみると、従業員とお客が大衆集会の模様を映しだしているテレビ・ニュースを食い入るように見つめて

いた。テレビは熱気にあふれるヴィクトリア広場での大衆集会を映しだしていた。

広場は、中華料理店から歩いて数分のところであったので、さっそく広場へかけつけた。中華料理店の外にでると、通りは旗をふり、シユプレヒ・コールを叫び若者を満載したトラックが続々広場に向かっていくのが見えた。まわりは真つ暗であったが、広場はサーチライトに照らされ、おびただしい市民が集まっていた。

広場に集まった市民は二つにわかれ、それぞれのあい反するスローガンを連呼していた。一つはチャウシェスク打倒後に組織された救国評議会を支持するイエリネスク！イエリネスク！という叫びと、イエリネスクらの旧指導部に指導されて社会主義体制の手直しを意味するにすぎない「民主化」路線に反対して、革命を徹底し、ルーマニアに民主主義回復を要求するヨシュ・コムニズモ（打倒共産主義）！ヨシュ・コムニズモ！という叫びとであった。広場の叫びは、七・三でヨシュ・コムニズモ！という叫びが大きかった。

日本の新聞報道などは東欧の変革を「東欧の民主化」という安易な表現をしているが、「民主化」路線ほど東欧民衆の要求からかけ離れたものはない。現在、ルーマニアをはじめとする東ヨーロッパ諸国でいわゆる「民主化」路線を追求する政治勢力は、社会主義というものが特定個人の独裁、特定組織による独裁を生み出したことを認めず、「民主化」によって、「社会主義」にも何かよいところを見いだそうということを実に口実にして、結局のところ権力に居座ろうとする体制派にはかならないのである。まさに「民主化」とは民主主義革命によって打倒された「社会主義」社会に寄生していた体制派が延命をはかろうとする論理以外の何物でもない。

国民の多くは、自分たちが要求しているのは、旧社会の手直しにすぎない「民主化」ではなく、デモクラチヤ（民主主義）だと言い切っていたことが印象的であった。